

第1回『戦争体験談語り継ぎ部養成講座』 神田 保 氏 (H25.10.22)

～学生時代の思い出～

橋尾先生の話の中にも出てきましたが、私が子どもの頃の思い出をお話します。橋尾先生の暮された都会と私の加西の田舎(農村)での生活では違う所がありますので、重複する点というのはそんなになんかと思いません。

学校は、尋常高等小学校に行きました。当時、太平洋戦争は大東亜戦争といって始まりました。太平洋戦争という名になったのは敗戦後で、それまでは大東亜戦争と言っていました。なぜ、大東亜戦争と言うかということ、その頃アジアを大東亜と言っていたからです。当時の東南アジアは先進国、今でいうイギリス、オランダ、フランスなどの領地で属国みたいな感じでした。日本は自分達のアジアを欧州の列強から植民地化されるのを防がないといけないという義侠心があり、日本がアジアの開放を言い始めると、先進国からいじめられて、「油がないのに日本に売るな」とあれも売れないこれも売れないと輸入が制限され、だんだん苦しくなりました。やはりアメリカ、イギリス、フランスなどがものすごく力を持っているので、先進国がそういうこと言うと追従して皆がならうので、日本は切羽つまりました。

私は、戦争をせずに上手く外交的に話をして、解決出来る問題でなかったのではないかと思います。当時の方は相当苦慮されて、戦争をするか、外交的に上手くするか、国内でも二分して争われたそうですが、その当時は日本も軍事大国になりつつあったので、やはり陸軍の力に押し切られた感じだったそうです。そういう感じで戦争が始まりました。

私は小さい時のことはあまり記憶にありません。しかし、小学校5年生の時から戦争というものを意識していました。私たちの時代は、男女別学級でした。「男女7歳にして席を同じくせず」という法律が作られて、小学校1年の時から男女別々で勉強をしてきました。昭和21年ごろから男女共学になり、私は勉強は男子だけ、女子だけというよりも、男女共学にした方がいいなと思いました。私が卒業した後に共学になったと聞き、羨ましく思いました。

新制中学3年から共学になったので、親に「中学に行きたい。」と言うと、「何を言うてる。」と叱られました。昔は田舎の長男が跡を継ぐという風習があり、私も5人兄弟の長男だったので、母が「保は読み書きそろばんが出来ればいい。勉強をしてどうするの。親の跡を継いで、田んぼをして米を作るのに学問はいらない。」と言い切りました。堅苦しくて、いくら「友達が行くから僕も行きたい」と言っても、「あかん。」と言えば、絶対だめでした。今の子どもと違い、あまり親に文句を言えず、親がこう言えば従わなければいけません。その頃は、「親に孝行をしなさい」ということを小学校に入ったところからたたきこまれ、親には刃向かえないという気持ちがあったので、仕方なく中学3年は行かずに卒業しました。

その後、定時制が出来ると、友達が多く行って誘われました。私はその頃仕事をしていて、定時5時において、それから7時まで2時間残業をしていました。定時制のことをお袋に言いましたが、また頭ごなしに怒られました。「その2時間の残業代を頼りにしている。働かなくてどうする」とひどく怒られました。なぜ自分ばかり怒られなければならないのかと思いました。弟がおりますが、弟は怒られない。田んぼの草引きをしているときに「弟も呼んだらどうか」と言うと、「弟は勉強をして、上の学校に行かないといけない。跡取りでないの、家を出て世の社会に出ていかないといけないので、学問を身につけておかない

といけない。だから弟は中学も高校もやるけど、お前は読み書きそろばんが出来ればいい。勉強はいら
ない」その一点張りでした。

勉強は好きではなかったけど、友達と遊ぶのが好きで、学校へ行きたかったけど行けませんでした。
小学校は真冬で寒くても、半ズボンを履いていました。6年生の高等科に行かないと、長ズボンがはけま
せませんでした。靴下も短いし、手袋もはいてはだめ、ポケットに手いれてもだめ、厳しい決まりがありました。
朝学校へ行き、先生に挨拶をするのは5年生から敬礼をします。敬礼は学校の先生ではなく、軍隊関係
の方が来て指導がありました。学校も昔の校舎は木造で隙間風がひどく寒かったです。下級生は弁当
も寒いところで食べていました。

5年生ぐらいになると、食糧難で弁当が持っていきませんでした。朝も昼も雑炊なので、弁当に入れる
物がなく、家に食べに帰っていました。行き帰りに往復50分かかり、午後の授業が始まっていました。片
道25分もかかるので食べに帰りたくなかったですが、貧しくて、硬いご飯がありませんでした。米を作っ
ていましたが、働き手が少なく、肥料もなく出来が悪かったです。今のように自由に好きなだけ米を作っ
て売るとい時代ではありませんでした。等級によって、国に米を売る量が決めてありました。家族は子
どもが5人で、親父が早く亡くなり女手の家族で、他よりいい米がとれず、収穫も少なかったです。

食べる物が非常に不足し、米だけでは食べられないので、麦も作っていました。麦を売るのは自由で
した。昭和18・19・20年は食べるものがなくて大変でした。野菜の配給は、今のようにハウス栽培が無
かったので旬の違う野菜は食べられず、夏になればきゅうり・なす・とまと、春にはじゃがいも・たまねぎ、
冬には白菜・大根・里芋が出来ました。そういう野菜を農家は少しの空き地でも耕して作っていました。
少しでも野菜を作って、食べる食糧の足しにしなければ、いくら米や麦を作っても、政府の方から強制的
に出しなさいと言われましたから、どうにもなりません。だから、野菜を四季に応じて、十分にあ
り余るぐらい作って食べていました。肉や魚類がなかったので、いなごをとって食べていました。

とにかく食べるものがなくて、いつもお腹を空かせていました。「いつになったら、米のご飯がお腹いっ
ぱい食べられるかな。米のご飯だったらおかずがなくてもいいのに」と何度も思いました。そのくらいお
腹が空いて、食べるものがありませんでした。何でも食べていたので嫌いなものはありません。今の子や
孫は好き嫌いが激しく、食べたくないものは絶対食べない。時代が変わってくると、子どもの好き嫌いが
出てきて、食べなければ親は好きな食べものを作ってやる時代になってきました。そういうのが子どもに
とって果たして良いのか悪いのか、嫌なものを食べて病気になるのは別として、健康にいいものなら嫌
いでも、よくしつけて食べるようにするほうが子どものためには良いように思います。

5年生の時に、鶉野飛行場で直径70cm長さ1.5mのコンクリートのローラーで滑走路の地固めをし
ました。小学校から歩いて行って、お弁当を食べて地固めをして、また学校に帰って来ていました。そう
いうのが子ども心に非常にうれしかったです。今の小学校の子どもたちは社会見学とか体験教室とかた
くさんありますが、私たちの時分は何もありませんでした。遠足もなく、修学旅行もありませんでした。日
本全国で、修学旅行をしてない学年は昭和7年生まれだけです。戦火が激しいときで、もし修学旅行に
行って、敵襲にあつて空襲にあつたら大変だということで、あの1年は全国的に中止になりました。

だから、ローラー引きに行って、お弁当を食べて帰ってくるのがとても楽しかったです。今でも鶉野飛
行場には記念碑の横にローラーがあります。また是非見てください。私が通った日吉小だけでなく、昭
和7年生まれのぐらいの人は各学校とも順番にローラー引きに行っていました。

6年生ころになると食糧不足で小学校の運動場を開墾して、さつまいもと南瓜を作っていました。今だったら、いのししや鹿が来るので絶対だめですが、その当時はいませんでした。いたかもしれませんが、加西までは来なかったのも、さつまいもを作っても獣害はありませんでした。野菜を作るには肥料がいりませんが、さつまいもや南瓜は肥料があまりなくても作れます。そういうことから、さつまいもや南瓜を作っていました。

昭和20年ごろには、加西にもグラマン戦闘機が来ていました。いつも来る時は北の方から来て鶉野飛行場を爆撃して南の空へ消えて行き、とても大変でした。

小学校6年生の時は空襲や警戒警報があるたびに学校に行ったり帰ったりで、あまり勉強をしていません。一番嫌だったのは、わら人形を作ってアメリカの兵隊やイギリスの兵隊に思えと言われて、10m先から竹槍で突く練習をさせられたことです。やがて「本土決戦になれば、お前たちは命がけで竹槍をもって戦え」と言われ、毎日1日2回練習しました。あれは非常に嫌でした。

ラジオがある家は3件しかなく、新聞をとっている家も少なく、空襲や警戒警報はサイレンによって判断していました。学校にいて空襲警報がなったとき、防空壕は日吉神社の西側にあり、そこへ隠れていました。一度だけ戦闘機を見ました。こういう学生時代を過ごしてきました。